

[特別活動]

## 「ペアDEトーク」が児童同士の信頼感に及ぼす 影響に関する事例研究

須山 諒\*

### 1 問題の所在

文部科学省が小中学校における不登校やいじめなどの問題行動を把握するために実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果から、いじめの認知件数が平成24年度から急激に増え続け、令和5年度には、732,568件にまで増えた。また、令和5年度の小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は、346,482人にまで増えている。児童の不登校の要因を「学校に係る要因」で見ると、「いじめ」は全体の1.8%となっているが、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」は全体の11.5%と高い数値になっている。つまり、学校の中での友人関係の問題がいじめや不登校の大きな要因となっている。長根(1991)は、「小学校4年生から6年生が学校生活で感じる最大のストレスは友人関係である」としており、松下・今城(2016)「小学校高学年に友人と関係を築くことは、中学校入学への不安を低減する」と述べている。以上のことから、学校生活の中で児童同士の人間関係に問題があるため、児童同士で友好的関係を築いていく必要があると考える。

天貝(1995)は、安定した信頼感をもつ場合、人は他者をより支持的であると感じ、対人問題を感じる数が少ないとしており、酒井ら(2002)は、「総じて高いストレス状況に置かれた子どもたちが、それでも健全な学校生活を送っていくことができるためには、親や親友などの“重要な他者(significant other ; sullivan, 1953)”との間に基本的信頼感(Erikson, 1963)を形成していることが必要であると考えられる」と述べている。これらのことから、学校現場でいじめや不登校などが起こったとき、親や親友など自分にとって重要な他者との間に信頼感があれば、学校の中での問題に対し、子どもの精神的健康が守られると考える。そして、学校の中での重要な他者は、教師や学級の仲間である。その中でも友人関係に問題をかかえる子どもが多いことから、学級の仲間との信頼感を形成していく必要があると考える。中井・庄司(2008)は、Remrel et al(1985)の論文を引用して、信頼感をパートナーの行動を信じて、頼ることであり、パートナーの行動の予測可能性、パートナーとの関係性に対する自信と安心感と定義している。それを、中井(2016)は、中学生の友人に対する信頼感を「友人を信じて頼ること、友人の行動の予測可能性、友人との関係に対する自信と安心感、友人としての資質や能力に対する役割期待を含む。」と定義した。しかし、小学生の友人に対する信頼感は、管見の限り見つからなかった。発達段階が小学生と近いことと友人関係という関係性が同じことから、この中井の定義を参考にして、小学生の友人に対する信頼感の定義を「友人を信じて頼ること、友人の行動の予測可能性、友人との関係に対する自信と安心感、友人としての資質や能力に対する役割期待を含む。」とする。

田中・下田(2013)は、「自分が親友からどのように見られているのか、という点での不安感が関係していると思われるが、自己開示が友人に受容された場合、こういった不安感が解消されるとともに、親友に対する信頼感が高まるものと思われる」と述べている。また、大見(2001)によると、「自己開示を多く行っている生徒は、学校生活を楽しいと感じている場合が多いことから、自己開示から影響を受けた友人に対する信頼感は、学校生活の享受感情にも影響していると考えられる」と述べている。このことから、自己開示を行うことで信頼感を高めることができると考える。山田・粥川(2010)は、組織キャンプの活動の中に自己開示する場をもうけ、組織キャンプ中の信頼感と自己開示では、正の強い相関がみられたことから、信頼感または自己開示に影響を及ぼした際は、相互に関係して信頼感、自己開示に影響を与えることが明らかになった。したがって、組織キャンプは、対人関係能力を高める可能性の高い教育的な活動であることが示唆された。しかし、日常生活への継続的な効果については明らかにならなかった。組織キャンプは学校現場で継続的に行うのは難しいうえに、継続的な効果がみられないため、この方法では不十分だと考える。小野寺・河

\*長岡市立神田小学校

村（2003）は、物理的に実施時間を確保することが困難であるため各教科の時間や短学活の活用が有効であることを指摘している。このことから、教師の多忙化が背景としてあるため、教師の負担とならない活動が求められる。

継続的な自己開示の活動として、吉内・赤坂（2018）は、「ペアDEトーク」の実施をきっかけにして、児童がコミュニケーションをすることに対して積極的になったことやコミュニケーションをする機会や相手の量的参加がうかがわれたと述べている。また「ペアDEトーク」は朝の会の中で行うことができるため毎日実施できる点や、慣れてきたら日直の児童が進めていけるため担任の準備の負担が少ないなどの利点が挙げられると述べていることから、教師の負担となりにくいことが考えられる。横井（2014）は、「信頼は、馴れ親しんだ世界においてのみ可能である。信頼は、その背景が確実なものとなるために、歴史を必須とする。何の手がかりもなしに、何の以前の経験もなしに、信頼することは不可能である。」と述べていることから、「ペアDEトーク」によって信頼感を高めることができると考えられる。しかし、「ペアDEトーク」が信頼感に及ぼす影響に関する研究は管見の限り見当たらない。

よって、本研究では、「ペアDEトーク」が児童同士の信頼感に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

### (1) 調査対象・期間

対象：新潟県A市立小学校B小学6年生C学級20名 期間：2019年9月から11月

### (2) 調査の概要

学級で週に3から4回、朝学活等の時間において、ペアDEトークを行った。C学級は20名のため、全員とペアDEトークを行うために、ペアDEトークは全部で19回行った。ペアDEトーク1回あたりの時間は2分である。発話量が大きく偏らないように、話し手と聞き手に分けて行い、1分が経過すると役割を交代させた。担任であるD教師と相談し、テーマを設定した。テーマは、毎回同じものではなく毎回違うテーマで行った。

### (3) 効果の測定材料

#### ① 友人に対する信頼感尺度

研究対象学級である第6学年の児童に分かりやすい表現にすることを目的に、中井（前掲）の中学生の友人に対する信頼感尺度を参考に、現職教員3名と小学生に分かりやすい表現方法へと加筆修正し、小学生の友人に対する信頼感尺度を作成した。それを用いて、「ペアDEトーク」実施前後において、計2回のアンケート調査を行った。

#### ② 抽出児を中心としたペア内での発話

吉内・赤坂（前掲）は、「ペアDEトーク」の実施をきっかけにして、児童がコミュニケーションをすることに対して積極的になったことやコミュニケーションをする機会や相手の量的参加がうかがわれたと述べている。しかし、コミュニケーションの量については増加が見られたと考えられるが、質的な変容にまで検討が及んでいないと述べている。そこで、本研究では、友人に対する信頼感尺度の結果が特に上昇した抽出児3名の発話内容を分析し、どのようなかわりが学級の仲間の信頼感を高めるのか検証する。

#### ③ 振り返り用紙

児童が「ペアDEトーク」をやってみて、毎回どんな感想をもったか、どのようなことを考えていたのかを把握するため、自由記述で回答を求めた。

### (4) 分析方法

#### ① 中学生の友人に対する信頼感尺度（中井）を参考に作成した小学生の友人に対する信頼感尺度

アンケートより得られた数値を集計し、中野ら（2012）が開発した「js-STAR」を用いて分散分析（一要因参加者内）を行い、9月から11月にかけての児童の認知の変容を分析する。

#### ② 抽出児を中心としたペア内での発話

分析には、伊藤・高橋（2018）の発話カテゴリーを参考にし、現職教員2名と大学生1人と筆者の4人で協議し、カテゴリーに分類する。

①自己に関する情報	自己に関する情報についての発話
②上記以外の情報	上記以外の、持っている情報を共有するための発話。
③方向づけ	会話者の位置づけや話の流れの変化を促す発話。
④質問	方向づけも含めて相手に何かを問かける発話。
⑤意見	共有された情報と情報を関連付ける発話。相手の発話を受け、自分の考えや意見を盛り込んだ発話。
⑥評価	相手により新たに共有された情報と自己の持つ情報を関連付ける発話。自己の持つ情報が相手と共有されているか否か確認されていない発話。
⑦うなずき、相槌	相手の発話を肯定する発話・反応
⑧聞き返し	相手の言葉の繰り返しや聞き返しにあたる発話
⑨その他	①から⑧に当てはまらない発話

（図1-1）

図1-1 分類に用いた発話カテゴリー

③ 振り返り用紙

「ペアDEトーク」の感想についての児童の記述をKJ法でカテゴリー分類し分析する。

3 指導の実際・結果・考察

(1) 児童の学級における信頼感の変容の分析

児童の学級における信頼感は、11月調査において9月比で、以下のような結果となった。同様に信頼感の構成要素である3つの下位因子の変容は、以下のような結果となった(表1-1)。

表1-1 学級全体のC学級における信頼感尺度の変容

	時期	平均値	標準偏差	F比
総合	9月	102.8	10.52	0.01ns
	11月	102.6	13.05	
友人への安心	9月	50.35	7.84	0.24ns
	11月	50.8	7.61	
友人への不信	9月	42.65	3.68	0.65ns
	11月	41.75	5.26	
頼もしさの感覚	9月	9.8	1.6	0.50ns
	11月	10.05	1.39	

この結果から、C学級全体における信頼感は、9月と11月で有意な変化は見られなかった。水野(2003)は、Cynthia&Walter(1982), Rempel et al(1985)の論文を引用し、信頼の構造が男女で異なっていることを指摘していることから、男女で信頼感の違いがあることが予測される。そこで、より変化を詳しく見るために男女を分け、値の変化について分析を行った。以下の表は男女の結果である(表1-2, 表1-3)。

表1-2 男子児童のC学級における信頼感尺度の変容

	時期	平均値	標準偏差	F比
総合	9月	102.55	7.27	9.38*
	11月	107.55	8.56	
友人への安心	9月	51	4.83	24.92**
	11月	54	4.83	
友人への不信	9月	42.33	2.16	1.42ns
	11月	43.55	3.89	
頼もしさの感覚	9月	9.22	1.39	2.48ns
	11月	10	1.33	

N=9 (\*p<0.1, \*p<0.5, \*\*p<.01)

表1-3 女子児童のC学級における信頼感尺度の変容

	時期	平均値	標準偏差	F比
総合	9月	103	12.57	3.85†
	11月	98.54	14.59	
友人への安心	9月	49.81	9.59	1.51ns
	11月	48.18	8.44	
友人への不信	9月	42.9	4.25	2.37ns
	11月	40.27	5.75	
頼もしさの感覚	9月	10.27	1.6	0.14ns
	11月	10.09	1.44	

N=11 (\*p<0.1, \*p<0.5, \*\*p<.01)

これらの結果から、男子は総合において5%水準で有意に上昇していることが分かる。一方女子は、10%水準で有意傾向に低下している。下位因子ごとに結果を見ていくと、男子では、「友人への安心」において、1%水準で有意に上昇していた。また、「友人への不信」と「友人への頼もしさの感覚」は有意な変化は見られなかった。一方女子は、どの因子も有意差が見られなかった。この結果から、C学級において男子の信頼感の上昇が見られたが、女子の信頼感の上昇は見られなかった。

(2) 抽出児を中心としたペア内での発話分析

児童の発話分析を行うにあたって、男子の信頼感向上につながったものについて考察していく。そこで、男子は総得点が他の児童と比べて大きく上昇したF児、M児に着目して考察していく。会話中の発話について分類したところ、方向づけ、評価、その他にあたる発話は出現数がすべてにおいて10回に満たず、割合でも全体の発話の1%か2%であり、ほぼ出現していないと考えられた。そのため、以降の分析では除外することとした。「ペアDEトーク」の発話分析は自分が発した言葉を「自分の発言」、相手から発された言葉を「相手の発言」としてそれぞれカテゴリー分けを行った。(図2-1, 図2-2)。

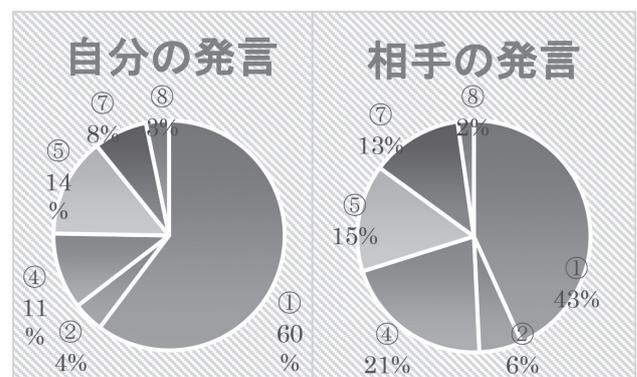


図2-1 F児の発話カテゴリー

表 2-1 F 児の会話内容

【10月9日 おすすめの〇〇】	
F児：えー、僕がおすすめるアニメは、えーと、いつも見てるんですけど、ワンピースはおすすめです。理由は、なんか、なんか戦うゲームみたいな戦うアニメみたいな感じで、ストレス発散とかになって面白いからです。	① ①
N児：はい。えっ他には？	⑦④
F児：他には、何見てるかな、あとは、えー、今まで見た中で面白かったのは、なんか3年A組とかも面白かったです。	①
N児：あー、ドラマね。あれ、ワンピースで好きなキャラクターは？	⑦④
F児：サボです。	①
N児：あたしハンコック。知ってる？	①④
F児：うん。ハンコックは知ってる。	⑦①

F 児の自分と相手の発言を比べたとき、自分の発言での①自己に関する情報の割合が高く、相手の発言での質問の割合が高いことが分かる (図 2-1)。F 児が自分のおすすめのお〇〇について話をしているところに、N 児が「他に何が好き?」、「好きなキャラクターは?」などF 児に対して質問をしている。そして、その質問への返答として自分の好きなものについて話すことができている (表 2-1)。永井ら (2007) は、相手に自分の話を十分に聞いてもらうなどの受容経験が信頼を高めると述べていることから、相手から質問され、自分に関する情報を多く相手に伝えたことが信頼感に影響を及ぼしたと考えられる。また、田中・下田 (前掲) は、男子に関しては、自己開示で自分らしさを友人に提示し受容的な対応を示されることが、自分らしさの感覚を形成するのに役立つと考えられ、自己開示を行うことで友人への信頼に影響を及ぼすと述べている。このことから、自分の話に対して、相手から質問が来ることで、自分のことをもっと話しても大丈夫という安心を感じ、自己開示をすることにつながったと考えられる。また、質問をしてくれることに、自分は受け入れられていると相手に安心を感じたと考えられる。

表 2-2 M 児の会話内容

【10月11日 クレヨンしんちゃんとドラえもんどっちが好き?】	
J児：はい、じゃあまあおれはどちらでもいいよ。	①
M児：どっちかと言えば？	④
J児：映画はドラえもんえい、うん映画はドラえもん。	①
M児：じゃあ映画はドラえもん、なんで？	④
J児：えークレヨンしんちゃんだとさっき言ったようにホラーがある。	⑤
M児：じゃあなんでドラえもんが好きなんですか？	①
J児：え？	⑧
M児：なんでドラえもんが好きなんですか？	④
J児：うーん。どちらかというどっちもどっちなんだよね。	①
ずーっと録画して、そのままずーっとウェー面白って見てるだけだもん。	②
M児：なんだそれ。	⑦
J児：暇つぶしに見てる録画して。	①
M児：どちらかと言えばどっちが好き？	④
J児：どちらかと言えばどっちも好き。	①
M児：どっちも好きなし。	③
J児：どちらかと言えばドラえもん	①
M児：ドラえもんだね。	⑦

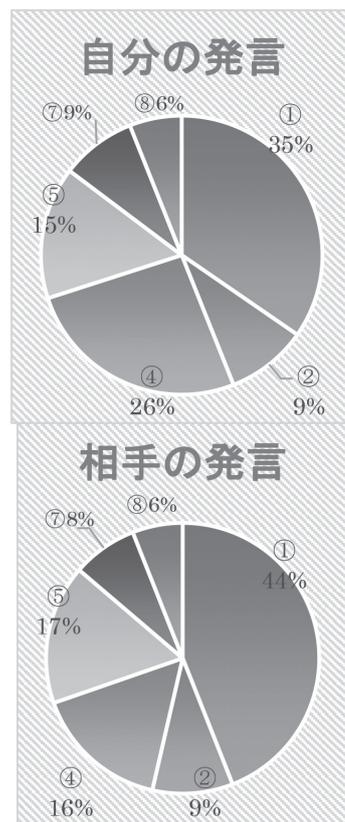


図 2-2 M 児の発話カテゴリー

M 児の自分と相手の発言を比べたとき、相手の発言での①自己に関する情報の割合が高く、自分の発言での質問の割合が高いことが分かる (図 2-1)。M 児が「どっちかといえば?」、「何で好きなんですか?」などJ 児に対して質問をしている。そして、その質問への返答としてJ 児が自分の情報について話すことができている (表 2-2)。伊藤ら (前掲) は、「質問」することで、相手の情報を得たり話を聞いたりすることで「話してもらえた」という被開示評価が高まると述べていて、水野 (2004) は、友人との信頼関係においては、「安心できる」ことが重要で、例えば「相手

のことをよく理解している」などの側面があると述べている。このことから、自分から質問をして、相手から質問の答えが返ってくることで、相手のことをよく知ることができ、安心を得ていると考えられる。

### (3) 「ペアDEトーク」の自由記述

毎回の「ペアDEトーク」の終了時に、やってみての感想や今回の話で盛り上がったことなど自由記述で考えを求めた。全ての記述から男女でそれぞれペアDEトークについて、毎回どのような感想が書かれているかをカテゴリーに分けて分析し、男女で分けて、それぞれで比べてみてペアDEトークについてどのようなことを大切に、感じているのかを考察していく。感想用紙は筆者が作成したものを、学級担任と協議のうえ、作成した。カテゴリー分析は、現職教員2名と学部生1人と筆者の4人で協議し、以下の表のカテゴリーに分類した（表3-1）。

表3-1 分類に用いた記述カテゴリー

①自分の情報、意見	テーマに対しての自分の記述。
②相手の情報	テーマに対しての相手の記述。
③共感	相手の意見に共感できるという記述。
④感情、相手の関心	相手の情報に対して感じたことや興味がわいた記述。
⑤話し合いの感想	話し合いについての記述。
⑥自分の姿勢	話し合いでの自分の姿勢についての記述。
⑦相手の姿勢	話し合いでの相手の姿勢についての記述。

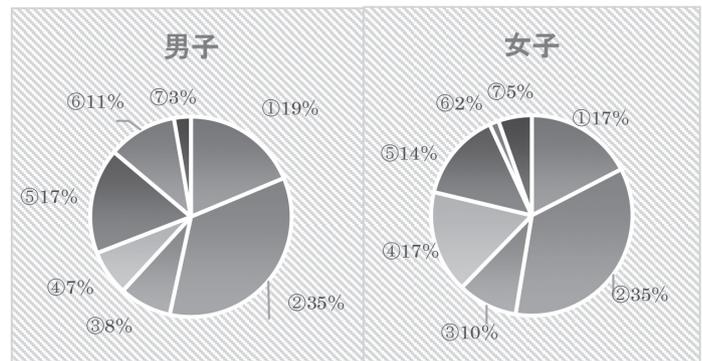


図3-1 感想用紙の記述カテゴリー

男子は女子と比べると、⑥自分の姿勢が高かった（図3-1）。⑥の記述には、「ちんもくを作らないようにくふうした。」「今日は自分から、質問をどんどんしていったのでよかったです。」など、男子は相手についてよりも、自分がどうだったかについて考える記述があった。このことから、男子は、ペアDEトークを上手く行えるように、会話を長く続けるために、質問など自分がどう工夫しようかという考えをもって、取り組んでいたことから会話が上手く発展していき、お互いに自己開示を行うことができたと考える。女子は男子と比べると、④感情、相手への関心は男子よりも高かった（図3-1）。④の記述には、「私の予想とは外れていました。」「趣味が合わなかったです。」など相手との発話についての感じ方や相手に対しての興味などの記述が多かった。このことから、女子は「ペアDEトーク」をした相手に対しての関心が高く、自分の好きなものが一緒であるかについて書いている記述が多かった。榎本（1999）は、女子は友人との行動や趣味の類似性を重要視した「親密確認活動」から他者を入れない固い絆を持った「閉鎖的活動」へと変化することがあり、女子は交流、共有を意識した「友人との信頼感」や「友人にどう思われているか」について男子より感じていることを示していると述べている。このことから、女子は相手からの意見や考えに対して、類似していないと信頼は感じにくいことが考えられ、今回の「ペアDEトーク」でも、相手と話していて、自分の好みとは合わなかったという場面も見られたことから、共通点が少ない学級の仲間に対しては信頼につながらなかった可能性がある。

## 4 全体考察

本研究は、近年の不登校やいじめの背景として指摘される「友人関係のつまずき」に対し、児童同士の信頼感を高める方策として「ペアDEトーク」を位置づけ、その効果を検証したものである。調査の結果、男子児童においては「友人への安心感」が有意に上昇し、発話分析や自由記述からも、質問と応答のやり取りを通じて、互いに受け入れられる経験を積んだことが信頼感の向上につながったことが確認された。一方、女子児童においては信頼感の上昇は見られず、むしろ低下傾向を示した。自由記述の内容からは、共通性の欠如が信頼感形成を妨げる要因となったことが考えられる。

以上の結果から、「ペアDEトーク」は「会話を続ける工夫」や「質問を通じた自己開示」を重視する男子児童には有効に機能するが、「相手との共通点や共感」を重視する女子児童にとっては十分な効果を発揮できなかったといえる。すなわち、本研究は児童の信頼感形成における男女差の特徴を明らかにし、活動の効果を一様に捉えるのではなく、児童の傾向に応じた工夫が必要であることを示した。

また、今回の実践は朝の会などの短時間に継続的に実施できるものであり、教師の負担を大きく増やさずに児童同士の関係づくりを支援できる点に実践的価値がある。その意味で、学級経営の基盤となる「安心できる人間関係づくり」

を日常的な活動の中で促す方法として一定の有効性が確認できたといえる。

一方で、本研究にはいくつかの課題も残された。第一に、使用した信頼感尺度は中学生用を修正して用いたものであり、小学生の発達段階に適した尺度の開発が今後必要である。第二に、対象が一学級20名という限定的な規模だったため、結果の一般化には限界がある。第三に調査期間が約2か月と短期にとどまったため、信頼感の高まりが一時的なものなのか、学級全体の人間関係に長期的な改善をもたらすかは明らかでない。

今後は、女子児童にも効果が期待できるように、共通点や共感を見出しやすいテーマを導入するなど活動内容を工夫するとともに、より適切な尺度の開発や複数学級での検証を進めていく必要がある。その先には、信頼感の育成を通じて、「いじめや不登校の予防」につなげ、児童が安心して学び合える学級・学校づくりに寄与するという大きな教育的意義が期待される。

## 引用文献

- ・天貝由美子：「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」、『教育心理学研究』, 43, pp.364-371, 1995.
- ・伊藤千夏・高橋史：「自己開示の抵抗感と印象の変化に影響する会話の特徴」、『信州心理臨床紀要』, 17, pp.9-17, 2018.
- ・榎本淳子：「青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化」, 47, pp.180-190, 1999.
- ・大見サキエ：「中学生の自己開示の研究－学校生活を中心に－」、『応用教育心理学研究』, 19, pp.13-24, 2001.
- ・小野寺正己・河村茂雄：「学校における対人関係能力育成プログラム研究の動向－学級単位の取り組みを中心に－」, 『カウンセリング研究』, 36, pp.78-87, 2003.
- ・吉内元子・赤坂真二：「クラス会議導入期における課題に対する手立ての検討－「ペアDEトーク」に着目して－」, 『上越教育大学教職大学院研究紀要』, 16, pp.25-33, 2019.
- ・酒井厚・菅原ますみ・眞築城和美・菅原健介・北村俊則：「中学生の親および親友との信頼関係と学校適応」, 『教育心理学研究』, 50, pp.12-22, 2002.
- ・田中沙依・下田芳幸：「中学生における友人に対する感情に関する研究－自己開示および本来感との相互影響性の検討－」, 『人間発達科学部紀要』, 8, pp.35-45, 2013.
- ・中井大介・庄司一子：「中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連」, 『発達心理学研究』, 19, pp.57-68, 2008.
- ・中井大介：「中学生の友人に対する信頼感と学級適応感との関連」, 『パーソナリティ研究』, 25, pp.10-25, 2016.
- ・永井将史・渡邊仁：「キャンプ経験が青年期の信頼感に及ぼす影響」, 『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』, 7, pp.53-61, 2007.
- ・長根光男：「学校生活における児童の心理的ストレスの分析－小学校4, 5, 6年生を対象にして－」, 『教育心理学研究』, 39, pp.182-185, 1991.
- ・中野博幸・田中敏：『フリーソフトjs-STARでかんたん統計データ分析』, 2012.
- ・松下理央・今城周造：「小学校高学年における友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響」, 『昭和女子大学生活心理研究』, 18, pp.55-69, 2016.
- ・水野将樹：「心理学研究における「信頼」概念についての展望」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 43, pp.185-195, 2003.
- ・水野将樹：「青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか－グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成－」, 『教育心理学研究』, 52, pp.170-185, 2004.
- ・文部科学省：「令和5年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」, 2024.
- ・山田亮・粥川道子：「大学キャンプ実習における参加者の信頼感および自己開示に及ぼす影響」, 『北翔大学生涯スポーツ部研究紀要』, 1, pp.83-91, 2010.
- ・横井夏子：「教育関係における信頼概念の特徴－ルーマンを手がかりに－」, 『東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室 研究室紀要』, 40, pp.243-253, 2014.